

理想主義的態度、事に當つて細心の研究を盡くし斷行するあの自信力と膽力とがなければ世の大事業は成し得るものではないと確信する。樋口君の死を惜む所以は實に此處にあるのである、無謀さか、危険さか云ふ事は、樋口君に於て全く用のない言葉であつたと思ふ。恰度吾々が遇然的のミステークを恐れずに自轉車や汽車に乗る様に。

樋口君の仕事は悉く生きて居る、云ふ迄もなく魂があるからである。人心動もすれば魂を失ひ不眞面目になり勝ちの世相に對し、樋口君の死は將に活を入れるものである、然ればこそ樋口君も男子の本望として安んじて眠られる事と思ふ。

## 噫 樋口 琢磨 君

尾 見 祐 八

昭和三年四月廿一日午前十一時頃であつた。長野の岸勝彌氏から突然の電話 『樋口君が怪我した』……『もうだめだ』『直ぐ試験場へ来い』……私はあまりの驚愕に何事も返事の仕様が無かつた、時計を見れば長野行次の電車に間に合ふのでその儘飛び出す、折からの祭禮の人混の中を縫ふて停車場へひた走りに走る。發車間際のプラットフォームには多くの人々が動いて居る様だつた、後部の座席に腰をおろす、電車は動き出した。あゝ夢ではないだらうか？ 樋口君が？ 樋口君が？ うそだ、きつと嘘だ、何かの間違だ。私が今行けば喜んで俺を迎へてくれるのだ。今俺に笑ひかけて居るではないか？ 『樋口君が怪我した』……『もうだめだ』……ほんごうだらうか？ 死？ 死？ そんなこゝは無い、きつと無い、あつてたまるものか？。

不安と憎愴との思を乗せて電車は走る。窓外の山森人家目に映じては消え去る。泣いてはいけな、泣いてはいけな

い、私は幾度か唇を食いしほつて目を窓外にそらした。

権堂驛に電車は着いた、樋口君を訪ねる時常に通る道を急ぐ、うるさい程人が通る自轉車が通る……樋口君は？』もうだめだ……死？考へられない、さうしても考へられない、生暖い風が砂塵を巻いて過ぎ行く。

蠶業試験場の本館が見える、ボヅラーの木が見える、だがだがさうしたのだらう、無氣味な程静まりかへつて居るでは無いか。樋口君はあの屋根の下にさうして居らるゝのだらう？ 立關に車を棄てゝ入る、多くの人達が靜に動いて居る。鶴田氏安川氏の顔が見える『樋口君はさうだ……安川氏の露を宿した眼がしばたく……いけぬい……低いそしてかすれた聲が私の耳を突く、あああ！矢張りけないのか？ いけないのか？ 死！死！あゝすべては去つた、一縷の望も消えて了つた。

さゝめも無くはふり落つる涙、口惜い口惜い残念だ。なぜそんなことをして呉れた？ 私は泣いた私は泣いた。

『彼の大胆が然らしめたのだ……あゝ後で話す……』松村氏は暗然としてさゝやかれた。私は導かるゝまゝに樋口君の居らるゝ宿直室へ行く。小さい部屋の中央に淡い北の光を受けて白布に覆はれた姿、あゝたしかに樋口君だ樋口君だ！

痛々しくも緋帯せられて、靜に靜に永遠の眠に就て居られた。縷々として立ち昇る香煙、枕邊に黙禱して居らるゝ井上先生、岸勝彌氏あゝ盟友樋口君は長逝せられたのか？ 君から手紙を頂いたのは一昨日であつた。そして君は言はれた『櫻の時節さ成りましたね……此の一週間さかく風邪にやられた、腰が痛む、目の玉が痛む、矢張病氣なんかするものぢやないね……』私は君の手紙を見たときに言い知れぬ淋し味を感じた。妻も話した君は決して弱音を吐く人ではなかつた筈だがさ、あゝ今が今迄元氣だつた君が、もう幽明境を異にした、こんな御姿になられようさは誰が考へませう逝かるゝ數日前であつた、君は水井蠶業試験場長から事績報告に戦すべき試験場の全景の寫眞の撮影方を依頼された。そして君は十九日にあの工業學校の高い煙突の頂上に登り試験場の正面から撮影された。然し其の寫眞が現像された時丁度來合せた鶴田氏に『さうも面白くない』と言はれ、責任觀念の強く、且つ繪の美しさを知る君は、より以上良き畫を

作らんものさ、希望して居られたことであらう。翌二十日午後三時頃君は試験場の全景を美しく撮るべき良き場所もがなき、櫻花咲く堤の邊を助手の竹前君と逍遙されて居つたが、遂に試験場の東北隅、桑園の中に建てる電柱上は好箇の撮影場所なりと考へられたであらう。それに攀登り試験場の後景を撮影せられた。そして歸途君は、助手に『君漏電して居つてビリ／＼して氣持が悪かつたよ』と言はれたさうな。あゝ思はなかつたであらう翌日其所が君の最後の場所ならうさは！。その寫眞は其の夕方助手竹前君と共に現像せられた。然し悲しむ可き事には、現像液の不良であつた關係から其の結果は不良であつた。それで君は藥液を調製し原板を取框に容れ、次の日の撮影を決心せられ、薄暮昭ちやんや、壽美ちやんの待つて居らるゝ君が寓居に歸られた。

其の翌日二十一日。あゝ實に悲しむべき日であつた。數日來君が令閨は風邪の氣味で臥床中であられたので君は炊事や二人の御子様方のお世話をせられ、出勤に際して君は愛兒壽美子ちやんに『オトウチャンが居なくとも、蓄音器を掛けることが出来る様に』と蓄音器の使用法を教へられ、そして『おまなしくして居るんですよ』と頭をなげて出て行かれしごか。あゝそしてそれから一時間も経たぬに死の幕に覆はるゝ運命を持つて居られしごは、誰もが思はざりし事であつた。九時頃出勤さるゝや直に寫眞器を肩に、櫻咲く庭を縫ふて昨日の堤防上を東へ東へあゝ惡魔に魅られたるならむ！吸ひ寄せらるゝが如く昨日撮影せし電柱の方へ！『あの一番上の赤い奴は氣持が悪いよ』なきゝ語りつゝ暫し眺てありしが『逆光線で拙いけれども影が出来てかへつて面白いかな』なき言ひつゝスリッパを脱して登る。燈用線の間を過ぎ高壓線を潜りて頂上に至り、直立して黒布を被り一枚撮影せられたが『天氣が良いからもう一枚撮るよ』と言はれつゝ、尙一枚を撮影し、寫眞器を箱に納めて肩に掛け將に下らんさせる一刹那、あはや君の身體は、三千三百ボルトの高壓線に觸れ一瞬にして死の幕に覆はれて了つたのであつた。

『君の大膽が然らしめたのだ』あゝ思ひきや君の偉大なる特徴が悲しむべし君を死に導くさはあゝ！そして我々は、實に偉大なる人物をこの世から失つて了つた。同窓生さしても、母校さしても、縣さしても、國さしても、實に／＼惜

しい人を失つて了つたのだ。

その日の午後四時頃であつた。急を聞いて來られた人々や、試験場の人達の涙に送られ、御令閨の案内で悲しく靜に徳永町の寓居に歸られた。今朝迄はほんの今朝迄、足ざりもしつかりさ踏しめて歩かれたであらう道を通つて！ あゝ夢の様だ、ほんきに夢の様だ。父の死も知らずに戯れて居らるゝ、今年四才の壽美子さん、二才の照ちやんを見ては、又涙を新にせられた。そして悲しい連夜は過ぎた。翌二十二日午前十時、告別式が行はれた。そして君の靈柩は春雨のを降る中を、一路君が郷里西鹽田村へ向はれた。夜に至り終日の雨はいつしか雪に變つた。そして綿をち切つた様な雪が暗の中に靜に散て居た。私は追憶の涙に寝つかれぬ一夜を明かした。

二十三日午後三時頃送葬の儀が行はれた。そして君が少年時代の思出の土地であらう鐵城山を南に臨む、小高き丘の松林中に、君は永遠に靜寂の深き眠りにつかれた。會葬者が三々五々故人の事も語りつゝ家路に急ぐ頃、天俄にかき曇り冷たい冷たい風は、大粒の雨をもたらし來た、かへり見れば君が安靜の地は雨に霞んで見えなかつた。私は電車の中から遙に合掌して君が冥福を祈りつゝ上田へ向つた。

そして初七日も過ぎた二十八日、御令閨は君が寓居長野市徳永町に來られた。然し君は今や亡し、玄關の戸を開いて入らるゝ御令閨の御胸中見るものすべてが思出の種なりしならむと、そゞろに涙にむせんで、何と申上て良いかわからなかつた。然し御令閨は言はれた『さう考へても今更任方がありませんから……一寸旅行に行つた位に……輕く考へさせて置いて居ります……松本の父は「洋行して居ると思つて居れ、そして今に立派な人間になつて歸つて來るを考へて居れ」なぞと申して居りますが……』今から三十一年経つて丁度君と同じ年になり立派な方にならるゝであらう昭ちやんは嬉々として御令閨の膝の上に遊んで居られた。

そして御令閨は二人の御子様と共に樋口君の生家小縣郡西鹽田村に御兩親にかしづかれて永住せらるゝ事になつた。私達養蠶科第五回卒業生を以て組織して居る慈勇會は、多くの人々に印せられて居るであらう亡き友樋口君に關する

思出、感想、それから遺稿、手紙、等をかき集めて上梓し樋口君の靈に捧げたいと考へて居ります、そして又故人の知己に御わかち致したいと考へて居ります、付きましてはさうぞ皆様六月三十日迄に長野縣須坂町上高井郡農會内尾見祐八宛御投稿下さる様伏して御願致します。

## 説苑

### 富士絹に就いて

上田蠶絲専門學校 杉 木 政 義

絹紡絲云へば、富士絹を聯想し、富士絹云へば、絹紡絲を聯想する程、兩者の間に切つても切れない、深い關係がある。云ふ譯は、絹紡絲の大部分は富士絹の原料として使用せられるからである。富士絹は絹紡絲の特色を以つて生命としてゐるからである。更に語を換へて云へば絹紡絲は富士絹に依つて立ち、富士絹は絹紡絲の價格の如何に依つて他の織物の販路を極度に獲得もすれば又極度に侵略もされ易い。此の傾向は何の織物でも大なり小なり存するけれども富士絹に於いては殊に甚しきものを見る。

一體絹紡絲を製造する絹紡績は原料を内地に仰ぐ唯一の紡績業であり、小なりと雖も世界の絹紡績總産額の大部分を占むる所に我が國として見逃す事の出来ない意義がある。全時に我々としての使命があり、富士絹を詮索する必要